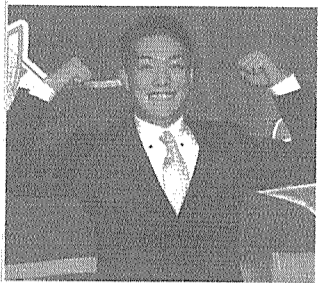


2010.11月15日発売(週刊ベースボール) 11.15



深江真登

関西独立リーグから初の指名選手が出た。明石・深江真登(龍谷大)がオリックスから5位で、神戸・福泉敬大(神港学園高)が巨人から育成3位で指名を受けた。深江は指名された直後に明石市内のホテルで会見。「うれしいの一言です」と満面の笑みで喜びを語った。母過ぎから会見予定のホテル内で待機していた深江は、CS放送が見られず、インターネット上の速報だけが頼りとはかりにパソコンとにらめっこ。自身の名前が画面に出た瞬間「飛び跳ねてしまいました」と、深江は今春大学を卒業、明石に入団。大学時代までは投手だったが、50kg・65秒という足の速さを買われ、野手に転向。内野安打する場面が何度も見られた。また、打撃センスも持ち合わせている。守備については遠投115mというだけに、シーズン前期まで指導してきた明石・北川公一監督は肩も強さも魅力だと言っていた。そんな深江が目標とするのはイチロー選手だ。会見では「3拍子そろった……、何をしてもトップレベルと言われる選手になりたいです」。また「200本安打を

また、今季突然の無給を決定などが原因で移籍する選手が出たなか、今季最後まで明石でプレーしたことに関して「どの独立リーグでも、目的は同じ野球。(自分の)やるべきことは同じ」と、まったく迷いはなかった。「自分がNPBで活躍すれば世間の見方も変わってくると思うので頑張りたい」とも語った。一方、巨人の育成3位に指名された福泉は、ドラフト当日、三田城山野球場で吉報を待っていた。昨年は明石に所属し、今季神戸で抑えとして活躍。今季指揮を執っていた神戸・池内豊監督は「シーズン中からNPB入りも期待できる選手の人」と語っていた。

関西独立リーグ3年目の構想

関西独立リーグは、10月26日に来季の運営方針の概要を発表した。それによると、来年は神戸に替り新たに兵庫県三田市を拠点とする「兵庫ブルーサンダーズ」と、かつて南海で活躍した門田博光氏が最高顧問を務める「大阪ホークスドリム」が加わり、既存の明石、韓国、紀州と5球団が参戦する予定だ。公式戦については、4月から10月をシーズンとし、うち4月と7月はNPBファームやクラブチームも参加するトーナメント戦を行う。5・6月を前期、8・9月を後期としたリーグ戦を行い、10月にリーグチャンピオンシップを行う予定だ。

リポート/中川路里香

2010.12月1日発売(週刊ベースボール) 12.13

大阪の新球団

来年、新たに関西独立リーグに参戦を予定する大阪ホークスドリム。医療機関へのキャリアサポート(人材派遣)に特化している会社が、昨年末にクラブチームとして立ち上げた球団だ。業務委託した企業へ選手らの派遣やセカンドキャリア支援などを行いながらNPBを目指す選手らを応援してきた。

今年、神戸と業務提携していた関西独立リーグとは縁があった。球団代表・川戸康嗣氏は「野球の技術を上げることはもちろん、人として成長できる場でありたい」と話す。シーズン乗り越えることは容易くないと分かっているが「勝ちに行きます」と、意気込みは熱い。

ネパール初の独立リーグ

昨年、ネパールから来日し独立リーグのトライアウトを受けていたイツソー・タバが、来季、関西独立リーグの選手となる。来年から参戦する大阪と、11月27日に契約をかわした。契約書にサインし終えての第一声は、満面の笑みで「メチャクチャうれしい」。ネパール初の独立リーグの誕生だ。

大阪・森本GMによれば「遠投や50m走など、ウチの入団基準を満たしていた」ことから契約に至った。「休憩中も練習をやめず、とにかく熱心」なところも好印象だった。イツソーは、ネパールで野球を広



イツソー

「自分を、応援してくれる人たちがたくさんいます。日本が何よりも大好きです。だから、不安よりも楽しみの方が大きい」(イツソー) ネパールでは仕事が多く、子供たちは成人すると外国へ出稼ぎに行くことも珍しくない。せっかく野球を覚えたも、途中でやめるのが普通だ。もし自分が野球で成功したら、これから野球を仕事として選択できる日がくるかもしれない。そんな夢と期待を胸に、来季、日本でプレーする。

リポート/中川路里香

2010.12月21日発売(週刊ベースボール) 1.3



最上奨吾

ホークスドリム陣容決定

関西独立リーグに新規参入を予定するホークスドリムは、12月15日に田中実氏の監督就任を発表した。田中監督は2010年シーズン途中から韓国へチの監督代行として指揮を執っていた人物だ。大阪は専任コーチを置かず、総監督の門田博光氏と、トレーニング面などで指導補佐する森本GMとの3人体制で11年を戦う。森本GMは「勝敗はもちろんだが、まず、選手個々の能力を伸ばし、元気のいいチーム作りを期待したい」と話した。

期待の若き右腕

「2011年シーズンに向けて本人のやる気がグッと増したんで、期待していただきたい」と、紀州・木村竹志球団代表が言うのが、最上奨吾(宮崎第一高)だ。10年春に高校を卒業して独立リーグ入りした19歳の投手。高校時代の監督が走り込み、素質を認められて紀州に入団した。藤井(法人)らとともに開幕当初から先発の柱として登板し、リーグ最多勝には1勝差で惜しくも届かなかったものの、チーム最多の10勝を挙げた。伸びのあ

る選手と、「緊張したことがない」と本人が言う通り、落ち着いた投げっぷりが魅力だ。シーズン前期は2勝だったのに対し、後期に8勝できたことについて「毎週試合があるという環境に慣れたことと、試合中の集中力の保ち方が分かった」と、吸気力の高さと伸びしろの長さも十分だ。さらに一番の収穫は、「スライダのキレがよくなって空振りが取れるようになったこと、MAXが142だったのに、145が普通に出せるようになったこと」だ。試合にも慣れ、スキルも上がったことで勝ち星が付き、徐々に手ごたえを感じ始めた。開幕当初から目標は10勝と言っていたものの、正直なところ「どれだけできるかわからなかった」。しかし結果が伴ったことで、少しづつだが自信が芽生えてきた。NPB入りも目標といいつつも、高校卒業時には「行けたらいいな」だったのが、今季終了時には「自分なら行ける」と明確な目標となったという。他リーグと違って、シーズンに入ってから練習時間が少なくなるのは分かっている。けれど、同様の環境で2人の選手がNPBのドラフトで指名されたことも大いに自信となつた。「かえって内容の濃い練習ができる」と、切り替えもうまい。「150km/hを出せるようにして、結果出して、2011年こそは」。2年目も紀州の地で飛躍を目指す。

リポート/中川路里香